

新聞記者は年を取ると、

書くより雑談している時間が長くなるようだ。雑談の方がおもしろい場合も。上司の論説委員長は、ただで

は話さないと豪語する ▼次の催

しはそんな世間に染まらない若い

世代の言葉が心を捉えた。8日の

土曜に行われた「土光杯全日本青

年弁論大会」（主催・フジサンケ

イグループ）だ。行政改革を推進

した土光敏夫氏の「若い人の声を

聞きたい」との願いから始まった

大会は38回を数える ▼新型コロナ

ナ対策で昨年に続きオンライン形

式、今年はユーチューブで生中継

配信もされた。テーマは「国難を

乗り越えるために」で、論旨70

点、態度声調15点、質疑応答15点

の計100点満点で採点された

▼講演慣れした弊紙論説委員長も

加わった辛口の審査をかくぐ

り、最優秀賞「土光杯」に輝いた

のは、東京大学の松下天風さん

（22）。誰とも会えない孤独感、や

りたいたことができない閉塞感…。

コロナ禍でさまざまな経験が失わ

れていることを指摘、「失われた

出合いの場」の工夫などを訴えた

▼松下さんは高校時代の4年

前、「人口減少社会と地方再生」

のテーマで社会保障制度の課題な

どを論じ土光杯を獲得、2度目の

栄冠だ。土光氏の出身地、岡山県

にちなんだ「特別賞岡山賞」に選

ばれたのは「水産業の構造改革を

したい」と訴えた松下政経塾の松

田彩さん（33）。漁業情報を共有す

るネット上のプラットフォームづ

くりや日本主導の国際海洋機関の

創設を提案した ▼審査委員長の

渡辺利夫・拓殖大学顧問は、登壇

した10人の若き論客の主張を通

し、①公に尽くす意味②共生感・

絆③経験を言葉にし伝える―大切

さを改めて感じたと話した。国難

を挑戦の機会に、という若い世代

の思いが頼もしい時間だった。